

看護学部設置の思い出

聖徳大学副学長 増井 三夫

はじめに

川並弘純学長が「看護学ジャーナル発刊に寄せて」において、私が水戸美津子先生を紹介したことを述べています。「看護学部設置の思い出」は水戸先生との「思い出」を軸に、水戸先生との再会-学長特別補佐-看護学部設置認可までの錯綜した記憶を辿ってみます。幸いにも水戸先生とのメールを保存していたことが役に立ちそうです。先生からの事前のご許可をいただいてここで活用します。

1. 水戸美津子先生のこと

看護学部設置に向けた取組は、私の大学人としての歴史を振り返ってみてまったく新たな挑戦でした。私は前職の小樽商科大学と上越教育大学時代に改革に関わっていましたが、常に研究との狭間であって喘ぎながら、しかし研究者としてこれに挑んできました。その理由は、改革には新たな発想と思考は不可欠であり、自己の発想と思考の限界を超え、その転換を不可欠とするので、思考の越境じたいに大変魅力を感じていたからです。私の研究スタイルはつねに挑戦にありました。私が育った東京教育大学大学院の研究室では異端児であったかもしれませんが、我が国の外国教育史研究をリードしてきた研究室ですが、私はその伝統的な権威のある方法から歴史学と社会学に軸足を置き、徹底した実証主義と論理性を貫き、新たな研究領域の歴史社会学に踏み出していました。私の論文は歴史学研究で最も伝統のある「史学雑誌」上で度々取り上げられましたが、しかしその誌上で極めて厳しい論評に出会いました。そのことが私を鍛えましたが、ドイツ史の権威である望田幸男先生から「新しい傾向の成果」として評価もされました。そんな異端児に常に温かい目で見守ってくださった先生が外国教育史の研究室を引き継ぎ、後に筑波大学副学長を経て聖徳大学前副学長に就任

された松島鈞先生でした。

川並学長と千葉大学看護学部長の会談に同席した帰路、学長は公用車から松島副学長に看護学部設置の進行状況をご報告されていました。平成23年12月7日のことです。その時松島先生は重篤な病に伏せていました。丁寧なご報告はもちろん学長の人間性に触れ感銘しました。そしてその日の夕方、帰宅した私に松島副学長から電話がありました。その内容は「熟慮に熟慮を重ねて、学長を支えなさい」ということでした。これが松島副学長と交わした最後の言葉となりました。その時私は学長補佐でした。

看護学部長の候補者がなかなか決まらないなかで、私はひそかに一人の意中の人物をいつ学長に紹介するかそのタイミングを計っていました。その人は水戸美津子先生でした。当時先生は自治医科大学看護学長・大学院看護学研究科長・大学附属病院副院長・看護職キャリア支援センター副センター長の要職に就いていました。水戸先生とは、上越時代、先生の新潟県立看護大学在職時代から親しくしておりました。先生は後に山梨県立看護大学へ移られます。私が上越教育大学副学長時代に全国国立大学副学長会議（会場：山梨大学）で甲府市を訪れたおりに、先生の大学を表敬訪問しています。大学院設置のお仕事で忙殺されていた頃でした。それ以来、先生が自治医科大学へ赴任されたのちも、音信は不通でした。しかし一度だけお会いしています。それは平成15年10月にM-GTA研究会場として上越教育大学の一室を提供したときです。私自身ベルリンでの留学時代に主専攻とは別にハーバーマスの質的研究法と合意形成論も学んでいたことと、上越教育大学大学院修了生で、金沢県立看護大学准教授の村井嘉子さんが博士後期課程に入りGTAで博士論文を書きたいということで、二人で当日参加しました。これがきっかけで村井さんは私の研究室で博士論文を作成することになります。そのおかげで、私は村井さんと機関誌「看護研究」掲載の論文をどっさり読む機会に恵

まれ看護学について若干の知識に接することができ、そして後日水戸先生に聖徳大学で質的研究法の講義を児童学研究科と教職大学院でお願いするきっかけになりました。振り返ると、先生との再会は偶然の糸に導かれたとしか言いようがありません。

学長に水戸先生を紹介し、学長との最初の出会いがなかったのは平成24年2月18日でした。その10日前の2月8日水曜日11時、松島副学長が急逝されて49日を過ぎていましたが、私は学長室に呼ばれ、副学長を命ぜられていました。水戸先生に18日の出会いの場所と時間を知らせるメールに、「2月8日、副学長の急逝にともない、私が副学長になりました。突然で、頭と気持ちと現実のベクトルがバラバラで、体調管理が大変です。再会できることを心より楽しみにしています。」と記していました。実はこのとき私には自律神経失調症という診断がついていました。8日に副学長を命ぜられたとき、「わかりました4月からですね」と確認すると、「いま、この瞬間からです」と言われ、さすがに動転したことを今でも忘れられません。

水戸先生は、実は、このときすでにある医療・福祉法人の要職に就くことに決まっており、「今後は、現場で仕事をしながら高齢者ケアと質的研究を深められるところで仕事ができる」ことを楽しみにしておられました。このことをうかがったときに、不思議と落胆・失望感はわいてきませんでした。むしろ、看護の現場に立った研究－最先端の実践研究に進まれる先生の情熱に、本学の看護学部設置に期待をつなぐことができました。それは、我田引水ではなく、率直な感情でした。

平成24年3月19日、理事会で看護学部新設に向け、設置準備委員会設置が承認され、いよいよ水戸先生が聖徳大学に足を踏み入れる環境がととのいました。平成24年4月26日、川並学長との面談が実現したのです。水戸先生はやはり聖徳大学の建学の精神「和」と聖徳教育の「人間教育」について事前に深く考え抜いていました。それは学長との歓談ではっきりとかがうことができました。水戸先生が目指す－あるべき看護師養成の基礎に建学の精神「和」と「人間教育」が合致しているという説明に私は聖徳大学に看護学部を設置する意義を確信することができました。水戸先生から翌日「惜しまず協力」するメー

ルをいただいたのです。水戸先生の誠実で、言行一致、責任を果たそうとする的確なご指示にもとづいて、設置準備の具体的な仕事が開始されました。教員リスト、卒業時に目指したい学生像と将来像、学内実習室整備、教員待遇などの検討事項が示されたのです。

水戸先生は改革者です。看護学部設置、そして設置以後の先生の活躍をみていると、改革にはビジョン、信念、情熱が大切であると実感しました。当時私は少ない時間を算段してはイギリスの経験主義を厳しく批判したカントの「実践理性批判」を原典と一緒に再読していたのですが、既存の看護教育に携わる人々のあいだにみられる功利主義と経験主義を厳しく排した先生の姿勢に、カントの主張が重なり、聖徳大学で先生と一緒に看護学部設置の仕事ができる日が遠くないとの確信を得ました。

2. 設置準備室のこと

学長は、「看護学ジャーナル発刊に寄せて」からもうかがわれるように、看護教育についての見識が豊かで、聖徳大学で「人間教育」にもとづく「理想の看護教育」を実現し、東葛地区の看護教育の中核的な役割を果たす理念を持ち続けていました。それに私は魅了されました。おそらく水戸先生もそうであったと察することができました。4月26日に大学を初めてお出でになったあとで、「本当に、素敵な大学」だとの印象を抱かれたようでしたから。この前後の水戸先生とのメールのやりとりを見ていると、心が揺れ動いていたよう思われます。

平成24年8月29日に設置準備室が立ち上がります。8号館7階会議室(8701)です。その時の室員で現在も活躍している先生は米澤弘恵先生、小林れい子先生、高山詩穂先生です。ユニークな先生たちです。準備室ではここ数年間で設置された他大学・学部の「設置認可申請書」が書架にずらっと並べられました。米澤先生から、「先生これらをしっかり読んで申請書案を作成してくださいよ」と真面目に、しかしあっさりとした口調で叱咤激励されました。これらの申請書より上にいくものを作らなければという気負いはありました。そういう思いはあったものの、何よりも苦悩したのは、やはり設置の趣旨と学生確保の

見通しでした。前者について構想するために改めてホスピタリティ精神とヒューマン・ケア精神に関する論文を漁っては読んでいました。

このとき水戸先生は「一般社団法人 高齢者ケア実践教育研究所」の立ち上げに携わっていたようです。そんなさなか、6月27日、水戸先生からメールが入りました。看護学部の人事に関する内容でしたが、私に対する激励のことばと思われる一文も記されていました。「目指す方向性（夢）と現実の狭間をうまくつなぎ合わせながら進むのは、スリリングであると同時に、大変楽しい作業でもあることを実感しております。」私も冒頭でのべたこと－「改革には新たな発想と思考は不可欠であり、自己の発想と思考の限界を超え、その転換を不可欠とするので、思考の越境じたいに大変魅力を感じていました」と重なる内容でした。「スリリング」という感性は水戸先生ならではのものです、改めて、先生の研究所立ち上げという新たな挑戦、そのエネルギーに圧倒されたことも忘れられません。私も新しいものを創る挑戦意欲だけは旺盛だったからです。

ようやく設置の趣旨案が出来上がりました。思い出に残る文章なのでその箇所を再録しておきたいと思います。

聖徳大学は前述したように、建学の理念「和」に基づく人間教育によって保育、学校教育、臨床心理、社会福祉、管理栄養士、文学、音楽の分野において、時代の要請に常に対応できる実践力のある専門職女性の育成に努め、「保育の聖徳[®]」に象徴されるように、一定の社会的な評価を得ている。その評価を得ている背景には、人間教育の基本原則である協調性、信頼性、自律性、および自立性が、後段で詳述するように、ホスピタリティ精神とヒューマン・ケア精神をそれらの特性として有していることがあげられ、そのことが同時に本学の人間教育に独自性を付与している。

本学の看護学部設置の趣旨は、現在の社会的な要請となっている「質の高い看護系人材」の養成について、本学の人間教育に基づき、看護を要する人々のために、また、市民の健康を守るために、自らを律し、チームの中で主体的に考えながら、実践することができる、凛とした専門職女性を育成することによって、貢献することにある。より

具体的には、千葉県保健医療計画（平成23年度～平成27年度）で示されている「質の高い保健医療提供体制の構築」という社会的要請に応え、看護職養成をととして地域社会への貢献機能を、本学は一層高めていきたいと考えている。

聖徳大学は、看護学部を設置するにあたり、かかる社会的要請に応えるために、以下の社会的役割を果たしていかなければならない。

- ① 高い人間の資質と倫理性を備え、高度な医療に従事できる実践能力のある看護職を養成すること。
- ② 地域特性を踏まえた地域保健医療福祉に貢献できること。

下線箇所は水戸先生が付け加えたものです。この「凛とした」は少なくとも私が認識していた聖徳の人材養成像を表すヴォキャブラリーにはなかった言葉です。新鮮でした。

ヒューマン・ケアの精神について付言すると、「聖徳大学は、看護学と保育学、教育学、心理学、社会福祉学、栄養学など関連他分野との共同研究により、広い次元の「ヒューマン・ケアの基本に関する実践能力」の開発と教育に新たな可能性を切り拓き、その成果を看護教育に活かすことができる」と述べています。今年度から看護学部と人間栄養学部でこの取組が着手されています。感慨深いものがあります。

学生確保の見通しを客観的データで示す課題は、或る程度予想していたとはいえ、クリアしなければならない難問でした。客観的データの認識について文部科学省大学設置室の対応も一貫していませんでした。4種類の質問紙調査とその統計解析によって学生確保の見通しを算出し、それを申請書案に記載しました。しかし重大な指摘を大学設置室から受けました。すなわち、この4種類の調査で回答者の重複数があり、これを入学者の予測数から除く必要がある、という指摘でした。学校法人分科会からも「改めて説明する」ことが求められました。そこで考え出した方法が、最大サンプル数の調査を使用し、ランダムに抽出したサンプルから母分散を求め、入学希望者を推定することです。それ以外の調査は傍証データとして活用しました。平成26年3月卒業見込生の「受験意向」は239名、「入学意向」は197名程度という結果で了承されました。大学設置室と学校法人分科会にたいするこの対応は、いま振り返って

も、「ヒヤヒヤ」ものでした。

カリキュラムの本格的検討は平成 25 年 2 月 9 日から水戸先生を中心に開始されました。それ以前から看護教育のコア・カリキュラムについて米澤先生たちからレクチャーを受けていましたが、その構造と体系性はたいへん興味深いものでした。後にカリキュラムマップの作成に携わることとなりますが、この時の体験がずいぶん参考になりました。

平成 25 年 10 月 24 日 17 時 50 分、文部科学省大学設置室から設置が認可された報告を受けます。それから 1 週間後、私は北千住駅に下車し数歩足を運んだ瞬間、まっすぐに歩けない自分に気づきました。初めての体験でした。意識はまっすぐ歩こうとしているのですが、右側に身体が傾いていくのです。必死になってホームを歩き、ベンチに腰掛けました。これからどうするか。草加に戻ると意識はおきず、大学へ向かおうという意識が先行しました。なぜだかわかりませんでした。必死になって、このまま倒れてしまうのではという不安に襲われながら、とにかく必死になって大学の研究室にたどりつきました。身体を休め、しばらくして保健センターで血圧を測りました。97 と 200 近くになっていました。私の普段の血圧は 77 と 120 です。ドクターはすぐに病院へ行くように勧めました。ちょうど米澤先生が部屋の前を通りかかりました。声をかけ、事情を話しました。米澤先生は即座に下の血圧を聞かれました。97 だと答えると、「先生、大丈夫よ、100 を超えていなければ、すこし休んだほうがいいですよ、次第に下がりますから、それから病院へ行かれるほうがよいと思いますよ」とアドバイスをいただきました。念のために、水戸先生の研究室のドアも叩きました。米澤先生と同じアドバイスをいただき、急に、気持ちが楽になりました。結局病院へいったときには 140 台に下がり、翌日は 120 台にもどりました。これも、かなり私事にかかわりますが、私にとっては忘れられない「看護学部設置の思い出」の一コマです。

余録

「凜とした」という言葉についての「思い出」をほんの少し述べます。これもまったく偶然の話です。私は平成 24 年 2 月から 4 月にかけて、ちょうど設置

趣旨を考えているときと重なっていますが、新聞と雑誌の切り抜きをしていました。とくに注意を払ったのはファッションでした。すでにフランスの社会史学界で *mentalité* マンタリテ（心性）がキーワードとなり、次から次と斬新で浩瀚な研究書が邦訳され、私もその認識方法に心酔し、これからの女性大学をリードしてほしい聖徳女性の *mentality*（心性）に強い関心を払っていました。そのために時代のトレンドをファッションで表現する感性に敏感になりたいという動機がつよく働いていたからです。私の感性が揺さぶられたのは 2012 年秋冬のミラノ・コレクションとコレクション・パリでした。前者のミラノ・コレクションを紹介する見出しは「強く女性らしく」でした。私は赤いボールペンをもって、ジル・サンダー、グッチ、ヴェルサーチ、ミッソーニといったデザイナーは「厳格さと優しさの共存、タフだけど温かい心を持つ女性を頭に描いた」箇所に赤線を引いています。また後者のコレクション・パリの見出しは「力強くパンツルック」でした。紹介文章の「今回のコレクションでは、多くのブランドがこの春夏のトレンドであるフェミニンな（女性らしい）スタイルからの方向転換を図った。（…）力強い印象の服が目立った」に赤線を引いています。とくにミュウミュウは柄物のパンツスーツで「凛々しさを強調」、ルイ・ヴィトン「力強い女性を打ち出した」。いずれも赤線が引かれています。私の意識は、これからの聖徳女性の *mentality* に優しさとは知性の共存をみていたのですが、赤線を引いたとはいえ「凛とした」という次元までは踏み込めませんでした。二つの異なった文明が交流するところから時代を切り拓く新たな文明が生まれたということはすでに実証された史実に属することですが、この文明を文化あるいは考え方、さらに別言すると理念 *idea* と言い換えることができます。聖徳大学看護学部の設置は、すくなくとも私にとっては、自己の内に新たな聖徳文化を創造する挑戦だったと思います。

聖徳大学看護学部で育つ女性たちは、聖徳の人間性とどのような新たな看護の理念を身につけていくことになるのか、それは方法や制度の次元の問題ではなく哲学－聖徳の看護教育の理念の次元の問題です。そのような思いが申請書案を構想し水戸先生たちと意見交換を繰り返すたびごとに鮮明になってき

たことを思い出します。それは、私にとっては、意識した、越境する知的活動だったといえます。いま振り返ってみると、この知的営みが、水戸先生が私に語った「目指す方向性（夢）と現実の狭間をうまくつなぎ合わせながら進むのは、スリリングであると同時に、大変楽しい作業でもある」ということと重なっていたと思います。

水戸先生が「スリリング」と表現することができた感性に驚きを禁じ得ませんでした。そこに込められている時代の変化を感知する感性とその変化を読む洞察力、そしてなによりも聖徳に相応しい—これからの看護教育を担う新たな理念を実現していこうとする精神を見いだすことはそれほど難しくはありません。その精神が、看護学研究科の設置でも発揮され、聖徳大学看護学部の実力となって評価されていることはいまでは周知のことになっています。